
優しいマフィアと笑顔の殺し屋

静野 たける

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しいマフィアと笑顔の殺し屋

【Nコード】

N12990

【作者名】

静野 たける

【あらすじ】

甘いマフィアが可愛い殺し屋に依頼するまで。

殺し屋可愛いと嬉しいっす。

(前書き)

ふと書いた短いのです。

視点が定まっていなくて、分かりづらい箇所があるかと思いますが、もしよろしければどうぞ。

感想、指摘してくれるとめっちゃ嬉しいです。。。

都会の喧噪から少し離れた閑静な住宅街に、一軒のこぢんまりとした銀行がある。銀行といえば金融機関であり、政府が直接管理する重要な施設だ。

「お電話ありがとうございます！ 皆様の信頼をお守りする、東草銀行です」

そんな銀行の中でも、一際小規模の東草銀行で、若い女性の甲高い声が響く。

「ご融資ですか？ お預け入れですか？ それとも借金のご相談？」

「オイ……それ全部電話じゃ受け付けないだろうが」

電話口からは低い男の声が聞こえる。

全く笑う気配はなく、ただただ女性を諷める。

「はい！ 軽い冗談でございます」

女性の甲高く語尾の伸びた声が耳に響く。

その妙に取っ付きにくい対応に、慣れた様子で男は呟く。

「『仕事』の方だ。このまま詳細を聞くか？」

『仕事』という部分を低く、誰にも聞こえないように注意を払った声色でいい、男は話を進める。

「いやだわお客様。汚れ仕事だからって電話で済まそうなんてえ」

重々しい男の雰囲気比べ、女性の調子は全く変わらない。

「いや、早く終わらせたほうがいいだろ。なら電話で……」

「お客様は電話のくぐもった声で私が誤解しても、いいといひのですねえ？」

「くぐもったといひても聞こえないほどじゃ……」

「むしろお客様は私をハメて他の組織に売ろうとしてるんじゃないかしら。まあ！ マフィアの風上にも置けないお方ねえ！」

「そつちに行きます。待つて下さい」

そう言つて、男は一方的に電話を切つた。

ガチャンという音が響き、少し経つて女性の笑い声が部屋を反復する。

「お待ちしております。……ウフフ」

それから三十分、女性は他に誰もいない銀行窓口で業務を続ける。すでに営業時間は終了している。

他の銀行員は別の『仕事』に出たきりだ。

部屋には女性がキーボードを打つカタカタという小気味のいい音だけがしている。そんな規則的な音だけが鳴つていた銀行にボタン！ という強めに扉を開ける音が響き渡る。

『ああん？』

さっきの笑顔が嘘みたいな女性の不機嫌な顔。

仕事を効率よく進めるにはリズムが重要だ。

リズムが崩れれば、同時にモチベーションも崩れ去る。

自分的には今の仕事環境は最高だったのだ。

それなのに、たった一度の扉の音によってリズムもモチベーションも消し飛んだ。消し飛ばした張本人、先ほどの電話の男は仏頂面を作りながらこちらに進んでくる。

「待たせたな、『仕事』のはな……!？」

男が言い切る事は許されなかった。

さっきまで机のパソコンと向かい合っていた女性は、いつの間にか男の喉を見上げるような形を取っている。問題は、彼女の右手には拳銃が握られていて、不機嫌そうな顔をしながら喉元に突きつけているということだ。

「死んでくださあい」

「いや、来たばっかなんだが、何故こんな状況なのか全く掴めないんだが」

口では平静を装い女性を諷めているが、銃を突きつけられた瞬間には持っていた荷物を床に落として両手を上げていた。

「私のライフワークを邪魔する者は消し去るのですう」

「……なんだかわからないが、本当に悪かった」

女性が冗談ではなく本気で機嫌が悪いと察した男は、事情が掴めないまま謝罪する。いくら相手が殺し屋でも、理由も分からず殺されかけるなんてご免被りたい。

「以後気を付けて下さいねえ」

女性は何事もなかったように銃を仕舞う。

最早仕事をする気も起きなくなったのか、女性は机に見向きもせず

に男をソファへ案内する。が、自分が先に座る。

「それで、今回のお仕事ってなんですかあ？」

「ああ、その前に……お前しかないのか？」

男は周囲を見回し、少々ウンザリした顔で聞く。

女性にはさっきまでの満面の笑みが戻っていた。

「はあい。他のみんなは只今外仕事でえす。いそがしいそがし」

暗い表情で沈み込む男。

女性としては、それは確実に癪に障る反応であり。

「私しかいないとお、何か問題あるんですかあ？」

それと同時にガチャリ、なんて音が聞こえた気がしたが怖いので気にしない。

「別にないんだが、お前に頼む機会が多い気がしてな……」

男が釈然としない風に呟き、女性が笑い飛ばす。

「あははあ。もう五年くらいになりますね。私はほぼあなたさまのお抱えみたいなものですよあ」

笑いながら、自ら出したお茶菓子の包みを手早く開けて口にする。

「まあ、つまり俺の依頼はお前が担当するように決まっているわけか」

「察しがいい人は好きですよ。ウフフ」

そういつてウインク、更に大根加減が半端じゃない笑い声。

「それにい、シンラあいかんけい？ ったのも築けてるんじゃないですかあ？」

『信頼関係』

そう言ってるのだろうが、最早同じ単語に聞こえず、そのため本当に信頼関係が築けているかは大いに疑問だった。というか絶対築けてないと思ふ。

そんな様子で男が女性を見つめていると、女性はその視線を全く気にする事なくビジネスモードに移行する。

「それでえ、『お仕事』の内容はなんですかあ？」

ようやくその気になった彼女に手早く伝えるべく、男は便乗する。慣れた手つきでさっき床に落としたアタッシュケースを開け、中から数枚の紙束を取り出した。

「ターゲットは優明党の鳥沢議員。他数名だ」

男は淡々と告げる。

「あれえ？その議員何かやってましたっけえ？狙うような理由はないと思うけどなあ」

女性の間延びした声に影響される事なく、男は低く淡々と言葉を継ぐ。

「今は大崎幹事長の派閥の一人に過ぎない。……が、奴のせいで議

員への支援金の受け渡しが幾度か危なくなっただことがある」

「ああ、出る杭は打つってやつですかあ」

男は黙って頷く。そこから更に説明を続ける。

「今時珍しい全く汚れていない男だ。もしかすると近い将来大物になる可能性もある」

そう言ったら組織にとって脅威だ。それは言われなくても女性でも分かった。

「まあ、お宅の組織が壊滅しようとして私たちに影響は全くありませんがあ」

女性はそういつてケラケラ笑う。男は不適に、低い声を少し愉快そうな声色に変えて言い放つ。

「お前達みたいな殺し屋の集まりを利用する顧客が減るのは痛いだろう。その点俺たちは存分に使う事が出来るぞ」

「人材派遣会社ですう」

ニコニコと、怖いくらいに女性は笑っていた。

「すみません」

どうも調子に乗りすぎたらしい。長年の付き合いで女性の怒った予兆というものが掴めるようになった男は、即座に謝る。触らぬ殺し屋に祟りなしだ。

それでえ、なんて甲高い声に笑みを混ぜて、下世話な話でもするように女性が声を出す。

「この『仕事』誰に頼まれたんですかあ？」
「……………」

男が女性の性格を理解しているように、女性も男の事情というものを理解しているのだ。

誰え？ 誰え？ なんて野次馬のように好奇心に満ち溢れた目でこつちを見てくる。こつち見んなー！そうは言えず、男は小さく呟く。

「……………松永先輩だ」

その様子に女性は大満足。といったように愉快そうに笑う。

「あつはははは！ あのオッサンですかあ。まだ死んでなかったんですね」

「笑い事じゃない！ あいつはいつもいつも汚い事を俺に押し付けて」

マフィアの組織図で、殺し屋に直接仕事を頼むような人間は、それなりに立場が上の人間が多い。

下の者は自ら働くからだ。上に行くほど人を動かすことになる。

確かにこの男も五年前から殺し屋に直接依頼しているのだからそれなりの地位にいる。

だがそれは、五年前に多くの同僚や先輩が敵対組織により殺されているからだ。

それにより繰り上がり方式で出世を重ね、男が自ら働いた期間はかなり短い。

思えば新入りのころに殺し屋の連中に挨拶に行ったときがこの女性と初めて会ったときだ。尤も五年前だと女性は高校に通う少女だったが。初めて会った彼女はよく笑う可愛い子だと思った。自分にも

積極的に話しかけてくれたし。

そういえば少女は初めて会ったときに『お近づきの印』をあげるとか言っていた気がする。結局何ももらっていないが。

……その二日後から、同僚や先輩達が殺されているのを男は知らない。

根掘り葉掘り愚痴ってしまった男は、少しバツが悪そうにしているが、聞いている女性は何も気にした風でなくこつちを見てにこやかに笑っている。

「……とにかく、今回は鳥沢議員だ。他の数名は余裕があれば構わない」

はいはい、なんて女性は間延びした返事で応える。

そこに慣れているから男は突っ込まないが、女性がタイトスカートを着用している脚をだらしなく開いているのは頂けなかった。

「オイ、女の子がそんなに脚を開くものじゃないぞ」

脚と脚の間は一メートルは離れており、男があともう少し下を覗けば下着まで見えてしまうのでは……という体勢だった。

「やだあ、セクハラですよねこれえ。抹殺ですよねえ？」

いつもの調子でやる気なく呟いているが、気のせいかな、女性の頬は微かに赤みを帯びているように見えた。今回はガチャリという音もしないので更に言う。

「もうそろそろ女性としても自覚を持った方がいい。もう女子高生の格好で『仕事』に行けるわけでもないしな」

はいはあいと適当な調子で返事し、女性は脚を直して肩くらいまである栗色の髪を掻き揚げる。

時刻は夜の二十時。

日没が早くなってきた今の時期では、誰かが死んでも騒がれない程度の暗さになっている。

男が腕時計を確認してまとめに入る。

「じゃあ、報酬だけ手短かに話す」

「私の口座をお願いしますねえ」

手短かといっても本当にこの程度だ。

長いビジネスパートナーである二人だからこそ、一言三言で話は終わらせられる。

「了解した。では、くれぐれも気をつけてな」

そういつて立ち上がり踵を返した男だが、そこで不意に女性が呼び止める。

普段は自分を見送ってさつさと『仕事』に移るのだ。

こういったことは珍しいため、男は声を発さず女性の意向を聞く。

「『お仕事』終わったらあ、私の仕事手伝って下さいっ！」

「……？ 馬鹿言っな。お前の殺しに何故俺が」

いえいえ、女性は首を横に振る。

「銀行の雑務業務ですよ。溜まりに溜まっちゃってえ」

「それこそ何故俺が！？ 他の奴に言えばいいだろ！」

「えー、皆いろいろ忙しいしい」

「俺だつて忙しいぞ？ お前俺が依頼しかしてないと思つてないか？」

「え、実際ここで適当に私たちの邪魔して面倒押し付けるだけでしょあ？」

「違う！ 他にもやることはあるぞ！」

強く普段より低い口調。常人ならその声だけで竦み上がらせることも出来そうなその声を、長年聞いている女性は全く気にせず口を尖らせる。

「ぶーう。相変わらずノリの悪い人ですねえ、じゃあもういいですよ」

ようやく諦めたか。そう判断した男は再び銀行を出ようとして。

「じゃあこの『お仕事』やーらない！」

またも甲高くも間延びした声に引き止められる。

「お前え！ ワガママもいい加減にしなさい！ お金をもらうんだ、ビジネスなんだぞ！」

「私ほどの大作家先生になるとお、仕事の選り好みが激しいんですよあ！」

誰が大作家先生だ！ そう思わずにはいられない。

最後の最後で振り回され肩で息をする男を見て、女性は満足げに、にこりと笑う。その様は、妖しくもとても綺麗に見えた。

「アハハあ。冗談ですよ。ちゃんとやりますってえ」

今日初めてじゃないだろうか、女性の真剣な瞳。

その眼を見て、男は妙に納得させられる。

未だにこいつのことは分からないが、確実に『仕事』を無事にこなしてくれる、そういう女であることは分かる。

「はあ、とにかく。気を付けるように」

「分かってますってえ。へまなんかしませんよお」

そういつて腕をグルグル回す女性。

「違う違う」

そんな女性を、男は考える事なく否定する。

「へまなんかどうでもいいぞ」

殺し屋に向けるべきでない言葉に、女性は頭を傾げる。

「ええ？」

「気を付けるのは、お前が無事である事だ。当然な」

それは男が当たり前に思っていることだ。

女性は殺し屋、自分はマフィア。

それ以前に高校生から知っている少女なのだ。

自分の知らない人間が何人死んでも男は気にしないが、心を許せる相手が死んでしまうのは、男は許せない。だからこそ願う。

失敗など二の次、女性がただ帰ってくる事を。

「……………ハイ」

女性の返事は、間延びしなかった。いつもより高く、その顔は確実に頬が上気していたと思う。だが、男はそれに触れずに部屋を出た。

「……エへへへ」

誰もいなくなった部屋で、女性はだらしなく口元緩ませる。

初めて会ったときから感じた。どうにも頼りない雰囲気。

今までマフィアなんて人種は自分達を道具としか見ない冷酷で粗暴な連中だと思っていた。

それなのにあの男は、五年前から変わらずに、間抜けなマフィアらしくない男のままだ。

だからこそ、最初から女性は彼を気に入ってるし、彼の仕事は無性に張り切ってしまう。

「さあて。いつきますかあ！」

女性の高らかな声。

そして女性は夜の闇に消えた。

その後の話をしよう。依頼開始から二日、四人ほどの遺体が発見される。

優明党の鳥沢議員。そして鳥沢議員の秘書二名と同期の議員が一名、同じく遺体で発見された。死因は四人とも肺を撃たれた事による失血死だ。

そして議員殺害事件から一週間後。今度は一人、遺体上がる。

被害者は住所不定無職の松永源五郎。

松永は、裏社会に繋がっていた可能性もあり、どこかの組織の報復

ではないかと見られている。

事件発生から一週間。マフィアの男は辟易しながら、殺し屋の女性は満足気な笑顔を浮かべながら、二人そろって銀行業務に精を出している。

(後書き)

あほ小説でしたがいかがでしょうか？

ちよとこれの話広げたいっていう気持ちもあるので、**時間と感想と**
相談していきながら決めたいと思います。
てかまだ他の作品おわってねーや……
では、ありがとございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1299o/>

優しいマフィアと笑顔の殺し屋

2010年10月11日09時08分発行